

カやスウェーデンなど、可能性を探りたい。

3) 甲信 YMCA 構想～信州に YMCA を

山梨のお隣の長野県は教育県としても名高く、そこに住む児童、青少年等に対するアプローチの仕方には無限の可能性があり、豊富な自然環境に恵まれた長野県では、今までも関東、関西の YMCA がスキーやサマーキャンプの会場として利用しているし、昨年の千曲川流域の洪水発生時にはボランティアの派遣活動を実施した。また、松本市、長野市には甲府クラブを親クラブとするワイズメンズクラブが存在し、YMCA が成立する条件はそろっている。甲信地区における YMCA グループとして、まずは甲府から 1 時間ほどの距離にある諏訪、松本地区にランチを設けたい。そのためのプロジェクトチームには何としても地元のリソースパーソンを得る活動が必要となる。果たしてその可能性は如何に…。

4) 野外環境教育活動拠点 (キャンプ場) の獲得～SDGs への対応

全国のいくつかの YMCA ではすでにキャンプ場を運営しているが、キャンプ場を持つと子供たちの成長に役立っているだけでなく、大学生を中心とするユースリーダーの育成の場となり、それぞれのオリジナルキャンプソングが生まれたり、思い出のモニュメントが残されたり、多くの若者にとって、そこが心のふるさととなっている事実がある。山梨ではハイ Y の瑞牆山のふもとでの活動が、それに代わるものと言えるが、施設としてはかつて三井ロッジがあっただけである。そこで青少年育成の場としてキャンプ場をぜひとも保有しておきたい。それをきっかけにハイ Y に代わる 21 世紀の山梨発 YMCA ユースエンパワーメントが実現するだろう。



おわりに

現在の山梨 YMCA に関する情報が必要と思われる内容を紹介した。YMCA の名の下に事業を展開していくには、まずその歴史と理念を正しく理解し、原則や使命に忠実に企画運営する必要がある。その上で、世界を見つめ (Think Globally)、地域に根ざす (Act Locally) ための将来構想を描き、それを形にしていかなければならない。一番重要なことはいかにしてリソースパーソンを見つけ、つながるか、ということである。その結果、新しい道が切り開かれ、新しい事業が軌道に乗る。そして地域社会がよくなっていくのである。山梨 YMCA は 75 周年を迎えたが、まだまだ成長段階にあり、可能性にあふれている。そのことに気づき、夢を描き続ける人がつながってゆけば、まだまだその働きは終わることはない。100 周年を迎えるまでに一つ一つその夢を形にしていきたい。

2021 年 5 月 23 日

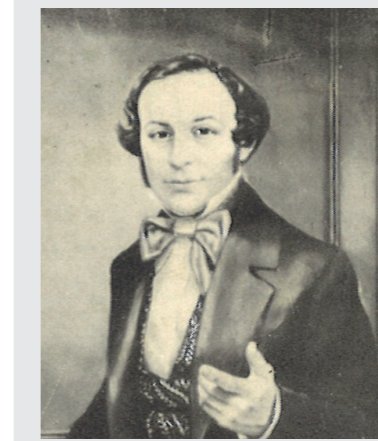
山梨 YMCA を理解するために

山梨 YMCA 総主事
露木淳司

1. YMCA の起源と世界的な広がり、そして YMCA を規定するもの

YMCA の起源を 5W1H で探ってみると、まずは **When** ～いつできたのか。1844 年、それは 19 世紀の中頃に起こった産業革命の時代のことだった。そして **Where** ～どこでできたのか、というと、日本に来たのはアメリカからであり、世界最大の規模を誇る YMCA がアメリカなので、必然的にアメリカが最初ではないか、と思っている人が多いかもしれない。が、実はイギリスのロンドンが発祥の地である。

次に **Who** ～誰が作ったのか、それはジョージ・ウィリアムズという当時まだ 22 歳の実業青年だった。貧しい片田舎の実家を出て、ロンドンに住み込みで働きに来ていた。そこで **What** ～何を作ったのか。それが Young Men's Christian Association



ジョージ・ウィリアムズ
(1821～1905)

すなわち、YMCA というキリスト教の信仰を基盤とする祈りの会だった。当初 12 人のメンバーからなるグループを世界で最初に立ち上げたのである。それを作った理由は **Why** ～なぜなのか。当時、ロンドンは産業革命の真ただ中ということだが、その時代の労働環境は極めて劣悪で、若者たちの心は腐敗していた。そこでジョージはその若者たちを救いたいという気持ちから、この運動を起こしたのである。そして **How** ～どのように活動は進められたのかというと、それは聖書の学びと祈りをベースにしながら、具体的に若者たちの生活環境を改善していくという活動だった。

こうして 1844 年にロンドンで始まった YMCA は 50 年代にアメリカにわたり、さらに全世界的に広がっていく。1855 年にヨーロッパを中心とした 9 か国になったところ

で、世界同盟がパリで生まれる。アジアでは 1857 年のインドのカルカッタが最初で、日本には 1880 年、東京で誕生することとなる。2021 年現在、スイスのジュネーブに本部を置く、世界 YMCA 同盟には 120 の国と地域が加盟し、6500 万人の会員が所属している。日本国内では 34 の都市 YMCA に 69,000 人が所属し、全国 37 か所の大学に学生 YMCA が存在している。

YMCA が世界的に広がっていく中で、YMCA と名乗る上での条件的な整備が必要になる。1855 年、パリで行われた最初の世界大会の際、「**パリ基準**」と称する根本原則が発表された。この原則は今も世界の YMCA を規定する大前提である。すなわち「聖書に基づいてイエスを神、救い主として仰ぐことと、神の国の拡張を願う青年を結合すること」を目的として定めている。その後、この基準をベースに全世界で様々な状況に応じて様々なプログラムが開発され、運動はますます勢力を増していく。事業の内容や対象が多岐にわたり進化していく中で、約 120 年後の 1973 年、今度はアフリカのウガンダで改めて原則が確認される。「**カンパラ原則**」である。青年限定だった対象はすべての人々に拡大解釈され、神の同労者として働く環境の整備、プログラムの開発、全人としての成長を目指すことなどを謳っている。

1996 年になって、日本 YMCA 同盟は日本独自の基本原則を採択する。ここで特徴的と思われるのは、パリとカンパラの文言をベースに、それまで触れられることのなかった「地球環境」と「平和」を意識する表現が含まれる日本特有のものとなったことである。また、イエスについての表記はその「愛と奉仕の生き方に学ぶ」とし、クリスチャン人口の少ない日本らしく、ノンクリスチャンが交わりやすくするための配慮が感じられる。

<日本 YMCA 基本原則> 1996 年採択

私たち日本の YMCA は、
イエス・キリストにおいて示された
愛と奉仕の生き方に学びつつ、
世界の YMCA とのつながりのなかで、

次の使命を担います。

私たちは、すべての人々が生涯をとおりて
全人的に成長することを願い、
すべてのいのちをかがやかせないものとして
守り育てます。

私たちは、一人ひとりの人権を守り、正義と
公正をもとめ、

喜びを共にし痛みをわかちあう社会をめざします。

私たちは、アジア・太平洋地域の人々への歴史的責任
を認識しつつ、

世界の人びとと共に平和の実現に努めます。

CA事業の多様化を見ると、多少その理想の
姿に近づいて来ているのかもしれない。使命
や原則は単なるお飾りではなく、定められて
いるからには、妥協することなく、その実現
に全力を挙げるべきで、今何が欠けているか
常に検証が必要であろう。

<山梨YMCAの使命> 1998年 採択

我ら山梨YMCAは、聖書に証しされたイエス・キリストを
わが神わが救い主と仰ぎ、その御旨に従い、全ての人々の精
神、知性、身体的全人的な成長を目指して、地域に根ざした
以下の働きを行います。

(1) 自己の価値を見出し、共に生きる社会を創り出すために、
青少年から高齢者までの、生涯にわたる学びのプログラムを
展開します。

(2) 創られた全てのものを大切に、自然と人間が共存して
ゆくための働きをすすめます。

(3) 全世界の人々と連帯し平和を実現してゆくために、特
にアジア地域における日本の歴史的な責任を自覚し、近隣諸
国とのより良い友好関係を育てます。

(4) 全ての人々と共に、真の自由と平等を実現するため、
差別や偏見を取り除くことに努めます。

3. YMCAから始まったもの

YMCAを語る上で、その長い歴史の中で
注目すべき事実があったことを知っておいて
欲しい。まず、アメリカのYMCAスプリン
グフィールドカレッジで、1891年、ネイ・
スミスという人物が、あのバスケットボール
を考案している。さらにその4年後、W. モー
ガンがバレーボールを産み出した。この2大
スポーツがYMCAで生まれたことは一般の
人にはほとんど知られていないが、紛れもな
く誇るべき事実である。日本では1888年ジョ
ンT. スウィフトが来日し、英語教育を普及。
英会話スクールの草分けとなった。1917年
には東京YMCA会館内に日本最初の室内
プールができ、クロール泳法を普及した。Y
MCAの体育事業は東京オリンピック開催に
も貢献した。1920年には大阪六甲で、日本
で最初の教育的組織キャンプが行われ、
1923年には山中湖畔に東京YMCAのキャ
ンプ場が設立される。このように明治、大正
にかけてYMCAが近代スポーツやレクリ
エーションの紹介、普及に果たした指導的役
割には目覚ましいものがあったのである。
山梨YMCAに関することで特筆すべきは、
ハイスクールYMCA、略してハイYが全国

2. 日本のYMCAと山梨YMCA

日本では1880年の東京から、1882年大阪、
1884年横浜、と連続して大都市に生まれて
いった。今でこそ当たり前のように使われて
いる「青年」という言葉は、日本初のYM
CAを作った初代会長小崎弘道が、ヤングメ
ンの訳語にこの「青年」という言葉を考案し
たときに生まれた。これで正式な日本語名は
基督教青年会となり、中国YMCAにも逆輸
入されたという。山梨YMCAは1946年、
第二次世界大戦後初の設立である。甲府の焼
け野原の中、ロンドンのジョージ・ウィリア
ムズの時と同じように、初代理事長市川規一
の歯科医院事務所で始まった。4年後、山小
屋風の最初の会館が与えられ、ワイズメンズ
クラブも誕生し、活発に事業が展開されるよ
うになると、1956年には少し大きな会館に
移った。その後、英会話、音楽教室、つぼみ
ぐる〜ぶ、ハイYなどの活動が盛んに行わ
れるようになる。1971年12月には3代目
の会館が連雀問屋街に開設。体育活動や野外
活動、ボーイスカウトの拠点としても活用さ
れた。

山梨YMCAの使命は1998年に採択され
るが、日本YMCAの基本原則を踏襲しつつ
も、パリ、カンパラの欠かすべきでないとい
判断した文言を掘り起こして、必要な要素はほ
ぼすべて盛り込み、漏れのない内容になって
いる。特にこの
時代にはまだ可
能性すら見えて
いなかった高齢
者福祉や環境教
育、開発教育的
なアプローチの
必要性を視野に
入れている。昨
今の山梨YM



ている施設だが、新たに小学校を卒業する子
供たちの受け皿として、中学生対象の「きら
きらプラス」を開講。近隣の空き家を借用して、



この春から南西教室B館としてオープンした。
中央市の田富恵みの家でも、りんごの木の利
用者が順調に増えて、こちらも幼児小学生を
分けて運営する必要から、現在新拠点を探し
ている。児童発達支援事業は一人のメンバー
が幼児から入ると、小学生、中高生と続き、
ゆくゆくは就労支援まで視野に入れる必要が
生じる。つまり、場合によっては一生涯伴走
することになるという、つきあいの長い「一
貫教育プログラム」と言えるのである。
そして、ぶどうの木はオープンして9年目を
迎える。利用者の介護度がだんだん上がっ
てきているのが気がかりなところであるが、デ
パート散策などが好評で、和気あいあいとし
たムードですっかり定着している。

8. 2021年度の課題と将来構想

山梨YMCAの課題は、当面、Withコロナの
過ごし方を確実なものとして、この時代をたく
ましく、安心、安全に生き延びるレジリエ
ンス(回復力)を獲得し、Postコロナに備え
るということ。
そして、重点目標は次の5点である。

- 1) 新たにオープンした本館「にじの家」
と南西B館(きらきらプラス)のフル稼働の
実現
- 2) メンバー急増の英語学童「キッズパラ
ダイス」の運営体制の強化、クラスの定着化
- 3) オリーブの木、野の花保育園の利用者
獲得、採算ベースに乗せる
- 4) ユースの力で地域・国際イベント企画、
シリーズ化、及び中高生プログラム開発

- 5) ワイズメンズクラブとの連携強化、バ
ザー、チャリティーランの完全復活



最後に2022年以降の将来構想として思い描
いていることを4つの夢として挙げておく。

<山梨YMCA将来構想>

1) LOVE FOR ALL, ケアコミュニティづくり 構想の全県展開

現在、甲府市から中央市に進出することが可
能となり、さらに甲斐市、韮崎市、北杜市、
富士北麓地区など、現在何らかのかかわり
を持つ地域を手始めに、まずは勢いのある児童
発達支援事業をベースに確実なコネクショ
ンをつなげていく。その後スタッフ体制が整っ
ていく順に学童保育や高齢者事業、野外活動
など、他の事業の拠点開発に取り組みたい。

2) 国際交流プログラム復活 タイ、オース トラリア、台湾等

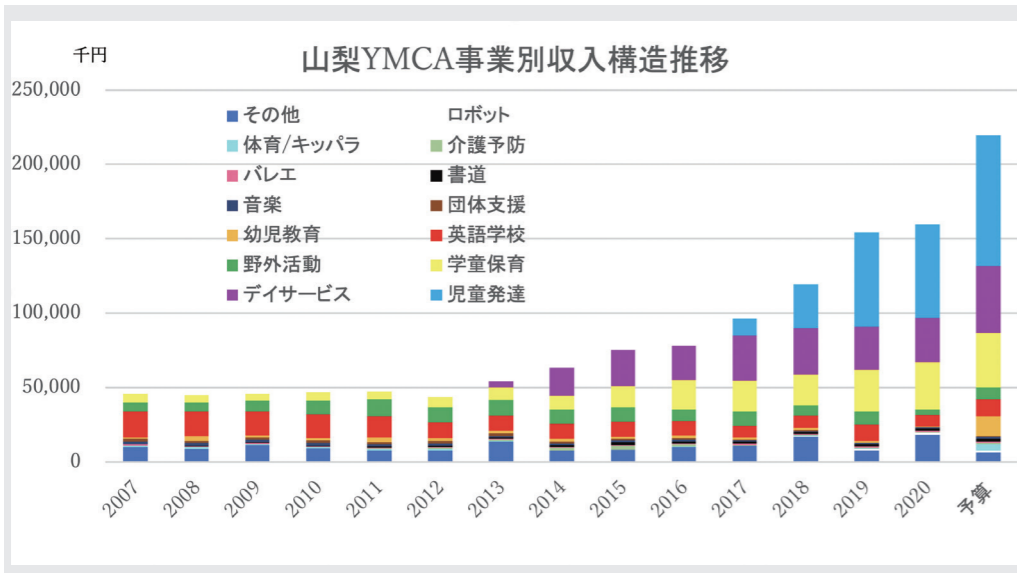
甲府ワイズがIBCを締結している台南や甲府
21がつながったオーストラリアのアデレー
ドなど、コロナ禍が落ち着いたら、それぞ
れの現地YMCAと提携して、何らかの交流プ
ログラムを立ち上げたい。深い関係者がいる
タイやフィリピン、かつて縁のあったアメリ

でも使いやすく、一年を通して快適に過ごせる最新の設備が与えられた。さらに第5代理事長布能壽英氏が口癖のように教えてくれていた“NO PARKING IS NO BUSINESS”「駐車場がなければ仕事にならない」の言葉に応える、たっぷりの駐車スペース、及びサッカーができるグラウンドまでもが備えられた。折からのコロナ禍の中、献堂式は中止となり、出鼻をくじかれた形となったが、利用者、保護者、スタッフ一丸となって、with コロナの過ごし方を身に着けて、この試練を乗り越えようとしている。

7. 収入構造の推移と現在の事業拠点

現在、基幹事業としてYMCAを支える柱は6本である。すなわち、昔から受け継がれている2本の柱、英語学校と野外活動。加えて、2003年に立ち上げ、2015年に市の委託が加わった学童保育、2013年開設の高齢者福祉、そして5本目の柱として2017年に誕生した児童発達支援は一気に大黒柱と呼べる存在に成長。2020年、さらに新会館オープンと同時に0,1,2歳児小規模保育施設「野の花保育園」がスタート。これはその前年に60年続いた歴史の幕を閉じた「つぼみぐる〜ぶ」に代わって誕生したもので、今年に入ってようやく園児増加の動きがあり、6本目の柱になる兆しが見えてきた。今は太さの十分でない柱もあるが、6本あるがゆえに辛抱強くその成長を見守る余裕が出てきている。

下のグラフは山梨YMCAの最近の収入構造の変遷を表したもので、6本の柱が建てら



れていく過程が見て取れる。特に2013年ぶどうの木ができてから徐々に事業規模が拡大し始め、特に2017年度以降の児童発達支援の成長ぶりは顕著で、当事者も驚きと戸惑いの色を隠せない。

ここで改めて今の山梨YMCAの活動状況を整理すると、拠点としては、甲府市中央3丁目の本館、下石田の南西望みの家、中央市の田富恵みの家、そして岡島デイサービスセンター「ぶどうの木」の4つのランチから成っている。



2020年5月に竣工した新会館である本館は、グローバルコミュニティセンターと名付けられ、FOR ALL「地域共生社会」を目指す施設とした。ここでは二つ目の通所介護施設「オリーブの木」、インターナショナルアフタースクール「キッズパラダイス」。発達障がい児支援の「きらきら教室」、低学年中心の学童保育「プライムタイム」、その他英語学校などの各種習い事の教室、多目的ホールを備えている。そして同じ敷地内に野の花保育園、倉庫棟を設けている。しかし、一周年にして早くも手狭になり、この2021年から南側の隣家を借用し、「にじの家」としてオープンした。こちらの家では幼児の児童発達支援「ぼかぼか教室」と甲府市からの委託で小学4年生以上の高学年中心の「放課後児童クラブ」を実施している。インクルーシブ学童の南西望みの家は、甲府中央教会から借り受け

的にもまれにみる発展を遂げたことである。県内の主要な高校には必ずと言っていいほどYMCAが存在した時代があった。これは1948年に著名なキリスト教思想家・賀川豊彦の講演が甲府一高で開催されたことがきっかけだった。英語のバイブルクラスやワークキャンプなどが盛んに行われ、やがてその歴史は幕を閉じるが、その頃培った絆と楽しかった思い出が、後のワイズメンズクラブにも受け継がれて、今もYMCAを支えている人たちが多くいる。今でいう「ユースエンパワーメント」の先駆けともいえるこの活動スタイルを、何らかの方法で、これからの時代に復活させられないか。現代版の中高校生プログラムのアプローチについての検討が待たれている。

4. ロゴマークの変遷と山梨YMCAの行動指針となるキーワード



①左のマークは世界共通のYMCAの正章で、赤い逆三角形が意味するものは「スピリット(精神)、マインド(知性)、ボディ(身体)の調和のとれた人格形成」である。1891年、アメリカのルーサー・ギュリックが唱えた理論で、YMCAの目指す全人教育の基本的なコンセプトである。真ん中にあるのは聖書で、ヨハネによる福音書の17章21節が開かれている。「すべての人を一つにしてください」という聖句で、国家、民族、人種、宗教を超えてFOR ALLを意味する。XPはギリシア語の救い主キリストの頭文字。②2番目の見慣れたマークは前述の正章の略式のもので、長い間、つい最近まで、

日本中のYMCAだけでなく、世界中の他の国でも愛され続けたなじみ深いものである。日本では今はもう使わない約束がなされている。③は北米YMCAでキャラクターディベロップメント運動として使われたロゴマークで、思いやり、誠実さ、責任感、尊敬心という四つの価値を大切にしている。四つの色にもそれぞれ意味付けがなされていた。④は全国YMCAで取り組んだブランディングで誕生した通称ポジティブYといわれる最新のロゴマークである。右上にある▽が前述の赤い逆三角形で、そこを顔に、Yの文字を羽に見立てて、平和の象徴、鳩が未来に向かって飛び立とうとしている姿をあしらっている。

前述の原則や使命及びこれらのロゴマークの意味するところをベースに、山梨のYMCAでは以下のキーワードを大切にしている。まずは、基本理念としての“FOR ALL”これは状況に応じて、「地域共生社会の実現」、「ケアコミュニティづくり」などと言い換えている。また、会館の名前となったグローバルコミュニティセンター。昔からのスローガン「世界を見つめ、地域に根ざす」。これも同様の意味合いとしてとらえている。次に行動指針として、イエスの生き方からその最も大切にしている教えが「隣人愛」(あなたの隣り人を愛せよ)であることから、**LOVE**の意味するところをその頭文字の意味するものとして、次の4つのコンセプトを掲げている。

- Life Support ~一人ひとりのLIFE(いのち、暮らし、人生)に寄り添い、生涯にわたって伴走
- Outreach ~社会的な弱者、支援を必要とする人を待つのではなく、こちらから見つけに行く
- Volunteer ~愛と奉仕の精神を持つ人々と連帯
- Education ~ Spirit Mind Bodyの全人教育

そして最後にブランディングから生まれたスローガン:
「みつかる、つながる、よくなっていく」

これは新時代のYMCAを代表する新しい標語としてお覚えいただきたい。

5. ブランディングと事業領域の整備

2010年代後半に入って、YMCAの事業活動が全国的に低迷する中で、全国YMCA総事会議では、果たしてYMCAは何をする団体なのか、世間の人々に知られているのか、という素朴な疑問が問いかけていた。そこで、全国的にモニタリングをしたところ、ほとんど知られていないことが判明。その理由は、全国のローカルYMCAがやっている内容に統一性が乏しいことにあった。そのことから、同様の問題を克服した米国YMCAの戦略を視察してきたスタッフを中心に検討チームが編成され、専門の業者による指導の下に、綿密な調査研究を経てブランディング作業が進められた。

その結果、ロゴマーク、スローガン、基本カラー、文字フォント等が、統一したイメージにまとめ上げられた。これにより全国各地のYMCAで、色も形もバラバラに作られていた看板や機関紙、ホームページ、スタッフ・メンバーのユニフォーム、ノベルティグッズ等のフォームやスタイルが原則同じ物になった。これにより、地域を越えて同じYMCAで働く者として、スタッフの意識が一つになり、以前にも増して連帯感を感じるようになった。



外見は同じになったが、中身が違っていただけでは意味がない、ということで、次に取り組みされたのが事業領域の整備である。各YMCAで現在やっている事業をリストアップし、まず世代、年齢の領域を分けした。さらに、それぞれの活動目的を分類、そこから大きく世代を三つに分けることができることが分かった。すなわち、

- ①子どもの成長に寄り添う「子育てと子育て」→保育園、児童発達支援、学童保育等
- ②若者の力を信じる「ユースエンパワーメント」→放課後児童高学年、中高生、ユースリーダー等

③健やかな生活を支える「生活クオリティの向上」→成人ウェルネス、生涯学習、高齢者支援等

一人の会員に対して、「乳幼児～児童」、「青少年」、「成人～高齢者」の三つの世代を通じて、生涯一貫して伴走していく考え方で、特に世代間を切れ目なくサポートするYMCAの姿勢を意味している。そしてもう一つ世代を超えて、災害や平和、多様性など広く社会問題に向き合い、日本そして世界に広がるネットワークを活かして愛と奉仕の精神で貢献していく活動がある。すなわち

④社会貢献の地域基盤となる「社会に貢献」→災害ボラ、チャリティーラン、ワイズメンズ活動等

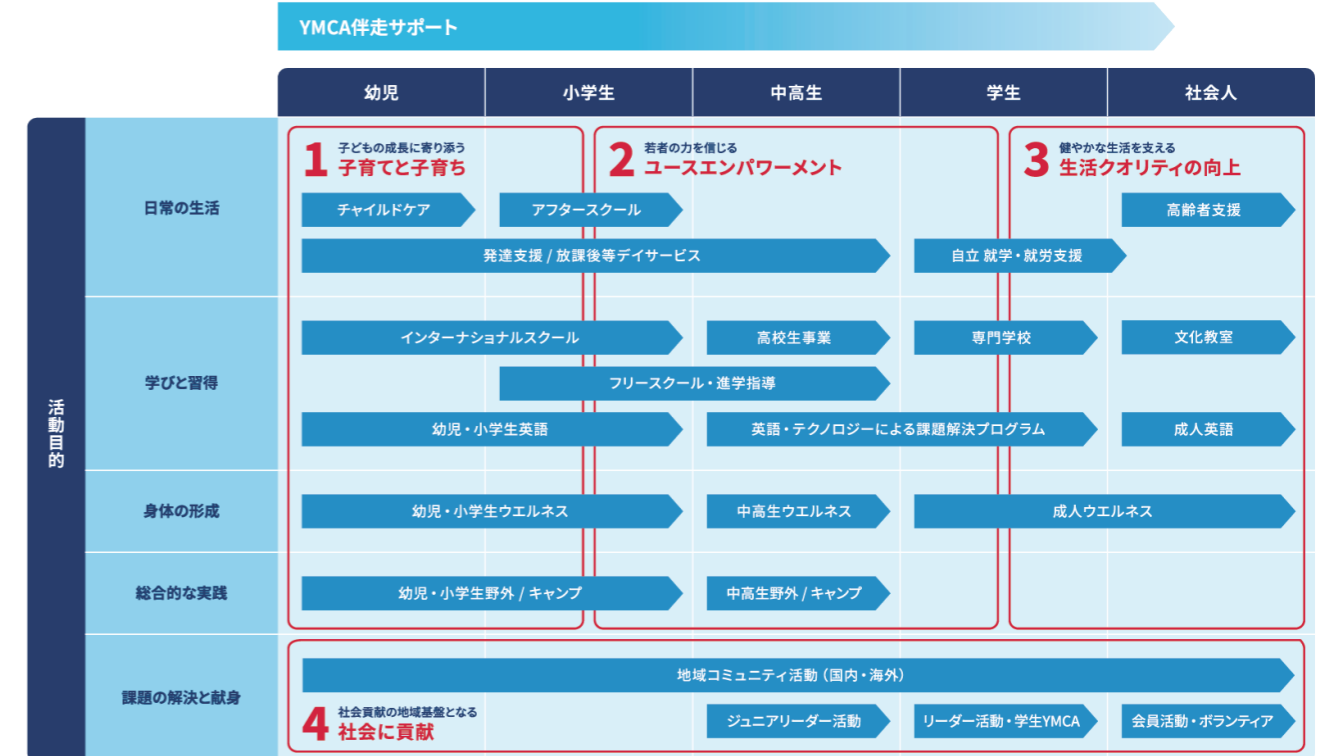
次のページの表は、この4領域を5つの目的に当てはめて、全人的成長プログラムとして図式化したものである。各地のYMCAは、常に事業内容をこの4領域に当てはめて、今やっている事業の立ち位置、目的を確認し、使命や原則に加えて、今、欠けている事業が何なのかを把握することができる。ちなみに山梨はどうかと振り返ると、2.のユースの強化が急務と思われる。4.の社会貢献に関しては、4つのワイズに支えられて、既存のチャリティーイベントだけでなく、今後の活動にさらに期待ができる体制が整っている。

6. この10年の歩み～柱が6本になるまで

2010～12年の山梨YMCAは、既存の事業が低迷し、ことごとく右肩下がりの様相を呈していた。特に長い間、山梨YMCAを支えてきた英語学校やつぼみぐる～ぷ、音楽教室などが落ち込んでいた。そこに東日本大震災が追い打ちをかけるように発生した。学童保育と野外活動の運営方法に工夫を凝らし、わいわい地球塾やグローバルサマーキャンプ、福島っ子支援キャンプなど、精いっぱい働きをしたが、運営体制の限界はいかんともしがたく、経営は行き詰まり、何としても新規事業が求められる状況にあった。

そこに救世主の如く現れたのが現山梨英和学院理事長の小野興子氏である。県立大学教授の職を辞したばかりで、医療福祉のケアコミュニティづくりを夢見る彼女と、高齢者福

YMCAの全人的成長プログラム



社事業を立ち上げたいYMCA側の思惑が見事にマッチして、新しいプロジェクトが始まった。ケアコミュニティづくり事業委員会が発足し、ボランティア育成を視野に入れたケア塾という講座を4か月にわたる15回シリーズで企画したり、日本のYMCAで最初に高齢者福祉事業を立ち上げた「とちぎYMCA」や「ケアタウン小平」の視察旅行にも出かけた。そしてついに2013年7月岡島デイサービス「ぶどうの木」が誕生。小野氏自らが施設長となり、ケア塾受講者がボランティアとして支えてくれ、ぶどうの木を半年で軌道に乗せることができた。このおかげで山梨YMCAの行く末に光明が差した。

それまで公益財団法人の認定を目指して毎月検討委員会が開かれ、県との折衝を5年にわたって続けていたが、2014年、ついに山梨県の法人の中では最後に、また全国のYMCAの中でも最後に認定通知を受けた。入れ替わるように山梨県の道路拡幅計画による立ち退き問題に対応する将来計画検討委員会が発足し、2015年から経営の専門家である野々垣健五氏主導の下に対策が練られることとなった。野々垣氏は、北は北海道から南は北九州まで、全国各地のYMCAの施設を視察するなど精力的に活動を展開し、委員会の開催は数十回、会館建設候補地は16か所に及んだ。

2016年には、学童保育プライムタイムに甲府市から4年生以上の受け入れの依頼があり、放課後児童クラブの受託事業が開始。学



童の収入が安定して得られるようになった。ただ、人数増に伴い、メンバーの中に発達に偏りのある児童の存在が目立つようになり、その対策を山梨ポーターズ協会に相談したところ、発達障害の専門家として中田純子氏を採用することとなった。発達障害児支援のニーズは思いのほか高く、2017年には小学生対象の放課後等児童デイ「きらきら教室」、幼児対象の児童発達支援「ぽかぽか教室」がスタート。2018年には甲府市下石田の南西望みの家で、健常児と障がい児を統合した「インクルーシブ学童」が、中央市の田富恵みの家では「りんごの木」がスタートした。

2019年、いよいよ新会館建設が着工。2020年3月、明るくきれいな会館が完成した。とっ